人権問題　性的マイノリティの子どもたち

平成２７年度栃木県教育委員会作成のリーフレットによると、人間の「性の在り方」は「男性と女性」に二分できるものではなく、「体の性」「心の性」「好きになる性」など様々な要素が複雑に絡み合い構成されていて、個人的な差があるものです。

「これが普通」「こうあるべき」と思われている「性の在り方」に当てはまらない少数の立場にある人たちは、総称して性的マイノリティといわれています。

性的マイノリティはＬＧＢＴと呼ばれることもあります。

Ｌ：Ｌｅｓｂｉａｎ（レズビアン）
　…女性同性愛者
Ｇ：Ｇａｙ（ゲイ）
　…男性同性愛者
Ｂ：Ｂｉｓｅｘｕａｌ（バイセクシュアル）
　…両性愛者
Ｔ：Ｔｒａｎｓｇｅｎｄｅｒ（トランスジェンダー）
　…性同一性障害など「体の性」と「心の性」が一致しない人

レインボーフラッグ
ＬＧＢＴの尊厳と社会運動を象徴する旗

※　性同一性障害は、「体の性」と「心の性」の不一致を感じている人たちに対する医学的な疾患名。アメリカ精神医学会が定めたガイドラインでは、2013年に「性同一性障害」から「性別違和」に変更されています。

※　ＬＧＢＴ以外にも先天的に性別が不明瞭の人や性愛の対象をもたない人など、様々な性的マイノリティがいます。

「身体計測時、男子は上半身裸、下は半ズボンでお願いします。」「修学旅行の入浴は、大浴場に一斉に入ります。」「中学生になったら、指定の制服を着用することになります。」

上のような発言は、一見どこの学校でも聞かれるような内容ですが、この言葉を苦痛に感じている子どもたちがいます。そのような子どもたちは、「世の中には女性と男性しかいない」「男性は女性を、女性は男性を好きになるのが当たり前」「男らしく、女らしく」などの決めつけた考え方や発言等、配慮を欠いた周囲の言動によって、自分を好きになれなかったり、ありのままの自分を表現できなかったりして生きづらさを感じています。

○知らないことや誤った情報が、偏見や差別に

最近、性的マイノリティについて様々な情報がメディアをとおして知られるようになってきましたが、まだまだ偏見や差別も多く、性的マイノリティの子どもたちの多くが誰にも言えずに一人悩み、苦しんでいる状況にあります。

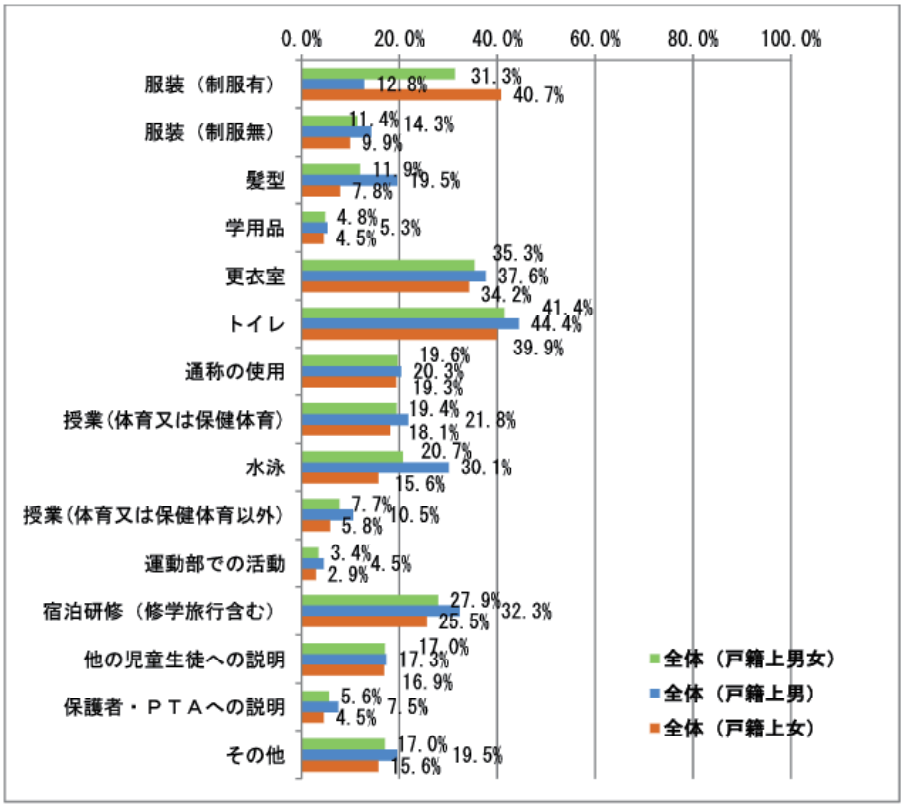
○子どもたちの生きづらさ

文部科学省は、平成２６年に全国の学校における性同一性障害に係る対応の状況を調査しました。その結果、606件の報告があったことを公表しました。

右のグラフは、学校側が性同一性障害の子どもたちに特別な配慮をしている場合の、具体的項目をグラフで表しています。数値が大きい項目ほど、子どもたちが困っている場面といえます。

しかし、性的マイノリティの子どもたちが、日常生活で感じる生きづらさは一人一人違っており、個別の対応が必要となります。

（イ）特別な配慮をしている場合、その具体の項目【複数選択】



出典：「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」（文部科学省　平成２６年）

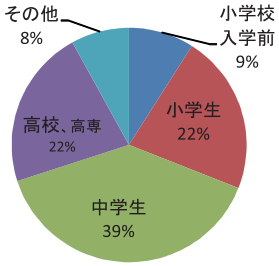
○性的マイノリティの子どもたちが安心して過ごせるように

子どもたちが自分らしく安心して幸せに生きていくためには、一人一人の違いが認められたり、「ありたい自分でいいんだ」と感じられたりするようにしていくことが大切です。

そのためには、私たち大人が人権について正しく認識し、多様な子どもたちがいることを前提とした言動をとることが求められます。性に対する固定観念や偏見をなくすことで、人権尊重の社会づくりに大きく近づくことになります。

ＬＧＢＴの学校生活における現状

① ＬＧＢＴであるかもしれないと気がついた時期



小学校入学前（９%）
小学生（２２%）
中学生（３９%）
高校、高専（２２%）
その他（８%）

② 自分がＬＧＢＴであることをリアル（注）で話した相手の人数（当時）

（注）インターネット上でのやりとり（ＳＮＳ 等）以外のコミュニケーション。電話や手紙はリアルに含む。

だれにも話さなかった（３９%）　１～４人（３３%）　５～９人（１４%）
１０～１９人（９%）　２０～４９人（３%）　５０人以上（３%）

③ どのような相手にＬＧＢＴであることを話したか（当時）（複数回答可）

同級生（７２%）　同年代の友人【部活の友人】（３５%）
同年代の友人【その他同じ学校の友人】（２４%）　担任の教師（１３%）
養護教諭（１４%）　父親（１０%）　母親（２３%）　きょうだい（１３%）
医師（８%）　カウンセラー（１５%）　当事者団体の人（１０%）　等

④ 話さなかった人がいた場合、その理由は何か（当時）（複数回答可）

特に話す必要を感じなかった（４５%）
理解されるか不安だった（６３%）
話すといじめや差別を受けそうだった（４４%）　等

⑤ いじめや暴力等を受けた経験がありますか（複数回答可）

身体的な暴力を受けた（２０%）　言葉による暴力を受けた（５３%）
性的な暴力（服を脱がされる、恥ずかしいことを強制させられるなど）を受けた（１１%）
無視や仲間はずれ（４９%）　経験はない（３２%）

⑥ いじめや暴力等をだれから受けたか（複数回答可）

同級生【男性】（６１%）　同級生【女性】（６３%）　担任の教師（１２%）
父親（９%）　母親（８%）　きょうだい（７%）　等

⑦ いじめや暴力等をだれかに相談しましたか

同級生【男性】（４%）　同級生【女性】（１１%）　担任の教師（１９%）
養護教諭（６%）　父親（７%）　母親（２９%）　きょうだい（３%）
医師（４%）　カウンセラー（８%）　誰にも相談しなかった（５２%）　等

⑧ いじめや暴力等を受けたことによる影響（複数回答可）

友だちが減った（１７%）　クラスで孤立した（２８%）　部活をやめることになった（６%）
学校に行くのが嫌になった（４３%）　学校を休みがちになった（１９%）
不登校になった（１２%）　別の学校に転校した（２%）　退学した（２%）
自殺を考えた（３２%）　わざと自分の身体を傷つけた（リストカットなど）（２２%）
眠れなくなった（１６%）　人を信じられなくなった（３７%）
ひきこもりがちになった（１６%）　勉強への意欲を失った（１６%）
今でも、その経験をときどき思い出す（４４%）
今でも、その経験を思い出すとつらくなる（３３%）
今ふりかえってみて、その後の人生にマイナスの影響があった（２５%）
今ふりかえってみて、かえってその後の人生にプラスになった（２３%）　等

調査対象者：ＬＧＢＴ当事者およびそうかも知れないと思っている人
2013 年時点で１０歳～３５歳である人
小学生から高校生の間、主に関東地方で過ごした人

出典：「LGBTの学校生活に関する実態調査」（いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン　平成26年）より作成